

■書 ■籍 ■紹 ■介

犬と猫と人間と

いのちをめぐる旅

飯田基晴 著

四六判 228 頁 定価 1,575 円(税込)

太郎次郎社エディタス

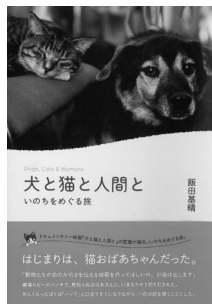
2010 年 10 月 ISBN978-4-8118-0737-9

——年間 30 万匹の犬・猫が殺処分されている。目の前の命への愛情と、救えない命への葛藤。感傷を乗り越えて、現実に向きあいつづける人々がいる。——

2009 年秋に公開され、すでに 3 万人以上が上映に足を運んだドキュメンタリー映画『犬と猫と人間と』*の監督が本書に綴った“いのち”をめぐる旅。そこには、殺処分という深刻な問題が、映画での取材内容に沿って描かれ、また映画以上に深く切り込んで読者に多くを訴えかける。

日々“人のいのち”に寄り添う医療従事者たちに、本書は、何を語りかけてくるのだろうか。

*本映画をめぐって雑誌『公衆衛生』2009 年 10 月号 pp.756-761 で監督インタビュー(対談)を掲載。



がん哲学外来から見えてきたもの

末期がん、その不安と怖れがなくなる日

樋野興夫 著

新書判 192 頁 定価 800 円(税込) 主婦の友社

2010 年 11 月 ISBN978-4-07-275263-0

がんを宣告されたとき、余命を告げられたとき、人は生と直面する。「だから、がん治療にも哲学が必要だ」と語った一人の病理医。癌のメカニズム解明を目指して研究に勤しむ著者の思いは、「がん哲学外来」という期間限定の特別外来として実現した。“聴診器もカルテもない外来、診療報酬もとらない無料の外来”。この稀有な試みは多くの共感者を得て、今では全国に広がっている。2 年余りの実践から得られた、ちからを抜いた言葉の数々が本書には鏤められている。

“がん患者さんと接するときに私がいじにしているのは「暇げ」な風貌です”と、著者は語る。心に隙をつくって患者さんと接する。そこには進歩した現代医療の隙間を埋めるがん医療の新しい形がみえる。がんで悩む人に、その家族や友人たちに、そしてがん医療に携わる方々に覗いてみてほしい一冊である。

